



yooooko_kn 様

愛用ミシン:メモリークラフト H8800/エスプリ 796R

ジャノメのおじちゃんと私

小学校の通学路、坂の下に、いつもおつかいに行く小さなスーパーがあった。

学校が終わり、坂を駆け下りて帰る時、時々スーパーの前でミシンを動かしているおじちゃんがあった。おじちゃんはいつもたくさん刺しゅうがしてある赤いエプロンをして、にこにこしながらお客さんにミシンを動かして見せていた。小学生だった私はお客さんではなかったが、ミシンの針が光のように動いて、少しずつ絵になっていくのが面白くて、興味津々で見せてもらった。まるで魔法だった。

ある時、おじちゃんがちいさな巾着を作ってくれた。キルト生地でできた、キャラクターの刺しゅうの入った巾着で、ひもを通す部分はクローバーの模様、虹色の糸で縫ってあった。

「おじょうちゃん、お名前は？」

と聞かれたので、答えた。

そのおじちゃんは、巾着にわたしの名前を入れてくれた。巾着は、ある時はナフキンを入れる袋、またある時は文房具を入れる袋になり、毎日の相棒となった。そしてキルトの糸は解け、色も薄汚れていった。

私は学生になり、大学へ通った。モノづくりとは全くかけ離れた学校だったが、モノづくりはとても好きだった。趣味の合う友達もでき、いつか自分の服を作ってみたいねなんて夢みたいに話をした。



大人になり、都会へ出て大きな会社に勤めたが、家庭の事情で地元に戻ってきた。私は地元
の会社に勤めながら、結婚をし、子供が生まれた。子供はよく乳を飲み、とても丸々としていた。

育休の終わりが近づき、子供を保育園に預ける手続きが終わった時、ひとつ問題が発生した。
子供へ着せる服がない。従姉からもらった服や、子供服屋さんに売っている服が、どれもスマ
ートで、ぷくぷくとしたわが子には合わなかったのだ。

近所のスーパーへ食品を買い物に行ったときに、ふと入口で懐かしい赤いエプロンのおじちゃん
をみつけた。もしかしたら、見覚えがあると私が勘違いしただけかもしれないが、そのおじちゃん
を見つけた時、とても懐かしい気持ちになった。

おじちゃんは、子供を連れてくる私を見て、「ぼくちゃんにね」、とキルト生地にしゅうのに入った、
ひもを通す部分はクローバーの模様、虹色の糸の巾着を作ってくれた。

ミシン！そう、ミシンがあれば作れるじゃない！と、私は思った。おじちゃんは私のよく話を聞いて
くれて、一台のミシンを選んでくれた。決して安くはない買い物。夫にも相談をしてミシンを購入
した。

小学校・中学校の家庭科で習ったきりのミシン。最初は使えるかドキドキしていたが、次第に自
分の手のように動くようになってくれた。型紙の本を買ったり、生地を買ったりしながら、子供の
服を作った。下手の横好きで構わない、と思いながら、ミシンを楽しんだ。

たくさんたくさんミシンを動かして、いつの間にか、子供の服だけではなく夫や自分の服、家のカ
ーテンやシーツ、生活に必要なものをたくさん作れるようになった。インターネットを通して、自分
と同じようにミシンを楽しんでいる人達と繋がった。



その時初めて買ったミシンは、私の人生を楽しくしてくれた。世界を広げてくれた。

そんなことがあったとは、おじちゃんには知らないだろう。それでも、ジャンメの赤いエプロンのおじちゃんには、感謝している。きっと今日も、明日も、毎日同じように夢の詰まった巾着を配っているんだろうなと思う。

いつまでも元気でいてください。

